長者ケ原廃寺跡

－古代末期の寺院跡－

北からみた長者ケ原廃寺跡　奥に見えるのが関山

長者ケ原廃寺跡は、中尊寺から北に約１㎞の奥州市衣川田中西に所在します。約 100m四方を築地塀で囲んだなかに、本堂や塔、門を備えた古代末期の寺院跡です。

この遺跡は、「平泉」が成立する前段階の 11 世紀に南北境界の地に置かれた寺院跡であり、12 世紀に浄土「平泉」の基点として関山丘陵に中尊寺が置かれた背景を物語る貴重な遺跡です。

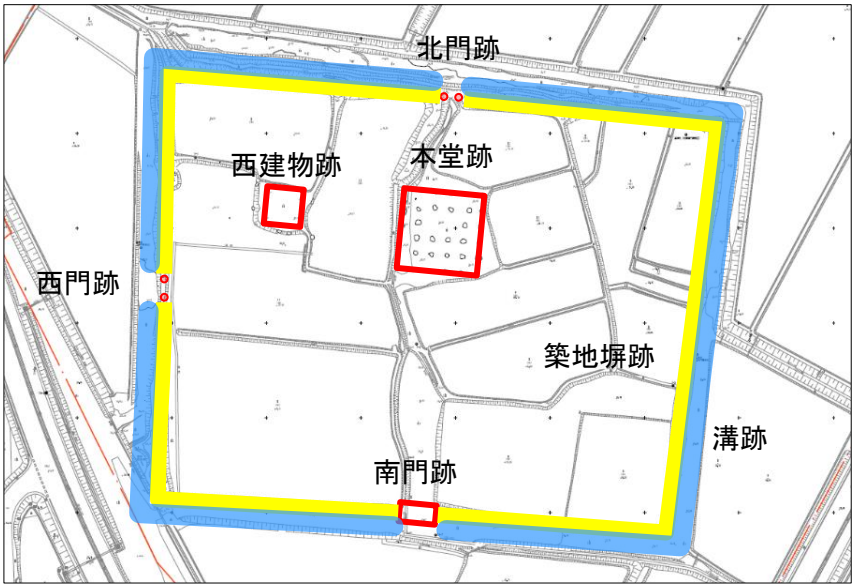
遺跡の概要

■寺院の構成と配置

遺跡は、東西 110m、南北 90mの規模で方形に築地塀跡が巡り、築地塀跡の外側には溝跡が伴っています。

築地塀跡南辺のほぼ中央には南門跡があり、塀跡の内部には本堂跡と西建物跡が中央やや後方に並置されています。

また、築地塀跡の西辺と北辺の中央にはそれぞれ、西門と北門があります。



▲ 長者ケ原廃寺跡全体図

■築地塀跡

築地塀跡は、西辺 90.5m、北辺 119.5m、東辺 92m、南辺 109.5m と北辺が長い台形をしています。基底部の幅は２～2.3m で、西辺と南辺が丁寧に作られています。築地塀跡には補修痕とみられる土が確認されており（写真の○）、築地塀が崩壊したのち、土塁として補修されたものと考えられます。土塁の基底部の幅は2.5～2.7m になります。

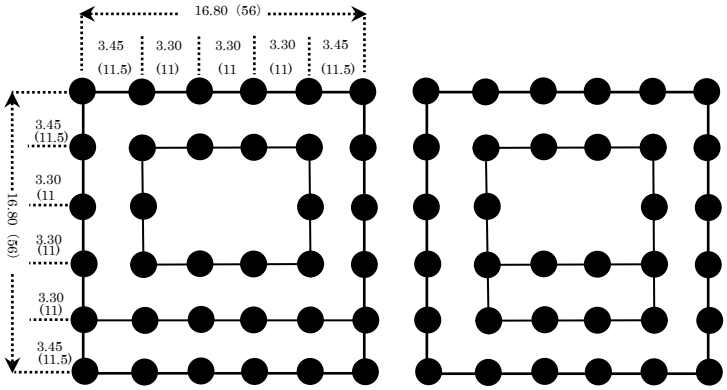
築地塀の外周には、幅３m、深さ 70 cmほどの溝跡がめぐっています。

▲ 築地塀跡の断面（左　西辺、右　北辺）

左は西辺、右は北辺の築地塀跡断面です。西辺と南辺の築地塀は、土を交互に積み重ねた版築工法の痕跡が明瞭ですが、北辺と東辺の築地塀跡は版築工法の痕跡がはっきりしません。また、北辺以外では築地塀の外側に、北辺では内側に、後に盛土した土が確認されており、築地塀跡が崩壊したのち土塁として補修されたと考えられます。

■本堂跡

本堂跡は桁行、梁行とも５間（16.8m四方）の礎石建物で、南孫庇付き三間四面堂跡あるいは双堂形式の方五間仏堂と推定されています。基壇の南辺と東辺南半部には基壇外装が確認されています。



（南孫庇付き三間四面堂の場合）　（双堂形式の場合）

※数字の単位はmで（　）内は尺

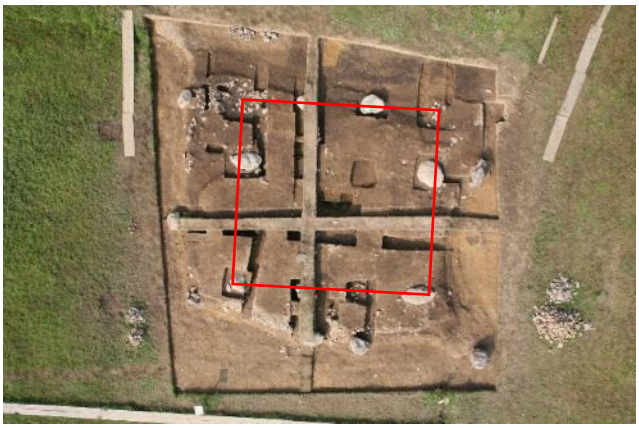
本堂跡基壇外装 ▶

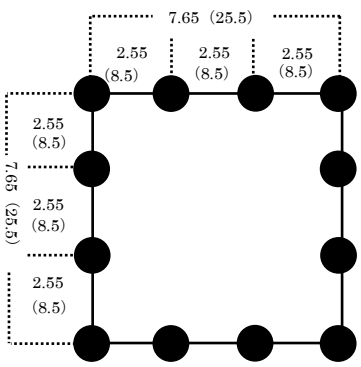
本堂跡の基壇の南辺と東辺の南半部では、細長い自然石を立て並べた基壇外装が確認されています。南辺の基壇外装は、真ん中１間がやや突出しており、階段の取り付きと考えられます。

■西建物跡

西建物跡は、３間×３間（7.65m四方）の礎石建物で、多宝塔跡または方三間堂跡の可能性が指摘されています。

寺院の建物のなかでは基壇の高さが最も高く造られています。

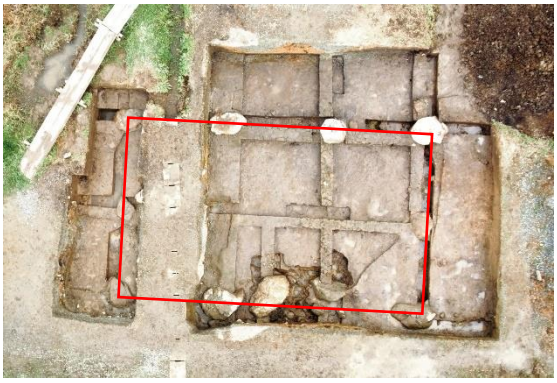


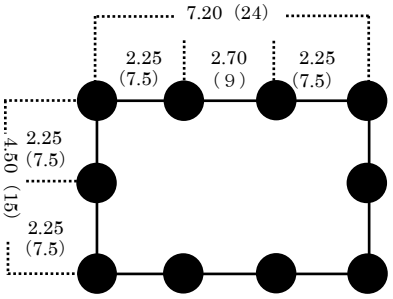


※数字の単位はmで（　）内は尺

■南門跡

南門跡は梁行３間、桁行２間（7.2×4.5m）の礎石建物です。真ん中の柱間が左右の柱間より広く、中柱を持たない形式の建物です。

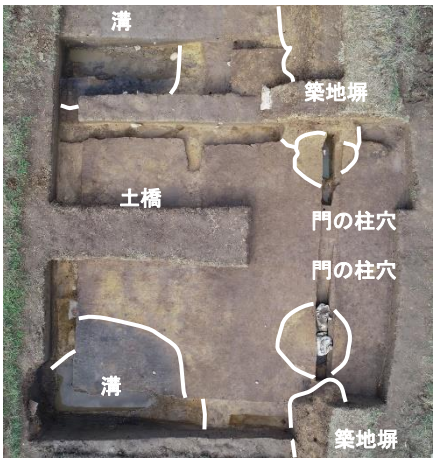




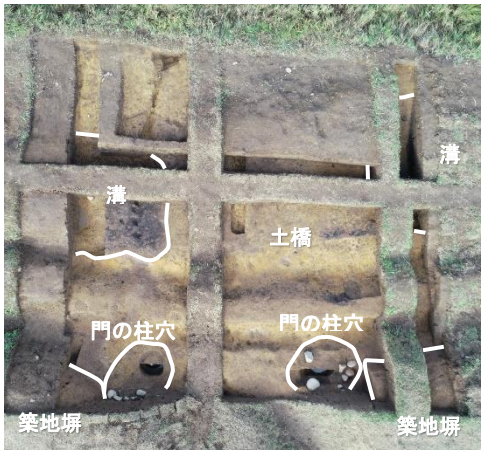
※数字の単位はm（　）内は尺

■西門跡、北門跡

築地塀跡北辺と西辺の中央には、それぞれ掘立柱建物の棟門が伴います。北門跡、西門跡のみ掘立柱式とほかの建物とは建築方法が異なりますが、ともに門の外側の溝跡が土橋となっていることから、寺院の創建当初から設置されていたとみられます。なお、東門は調査で確認できなかったことから、設置されなかったと考えられます。



▲ 西門跡



北門跡

いずれも柱間 3.3m（11 尺）で、門前の溝は掘り残され土橋になっています。

■出土した土器

南辺の築地塀跡と重なって確認された土坑跡から、土器がまとまって出土しました。土器の年代は、10 世紀末～11 世紀初頭に位置付けられ、寺院跡が機能した年代が明らかになりました。

長者ケ原廃寺跡と平泉

■長者ケ原廃寺跡と衣関

奥州藤原氏成立の前段階である 10～11 世紀、長者ケ原廃寺跡が所在する衣川地域は、奥六郡の南端にあたり、中尊寺が所在する関山には「衣関（ころものせき）」という関が設置されていたと考えられています。実際、中尊寺境内では広範囲を囲む 10 世紀の大溝跡が発掘調査により発見されています。長者ケ原廃寺跡は、「衣関」と同時期に存在した寺院であり、寺院の中軸線が関山山頂に向かって設定されていることから、「衣関」に関わって設置された寺院の可能性が非常に高いといえます。

■衣関から中尊寺へ

奥州藤原氏誕生の契機ともなった前九年合戦において「衣川関」（衣関とは別施設という説もあります）は、奥六郡との境界地として激戦が繰り広げられた場所でした。当時の人々にとっての関山は戦の時代を象徴するものであったとも考えられます。

藤原清衡は、このような南北境界の地であり戦乱の時代の象徴でもあった「衣関（衣川関）」の跡地に、浄土・平泉の基点として中尊寺を建立します。長者ケ原廃寺跡は「衣関」であった関山を望むよう配置されており、関山が 12 世紀に奥州藤原氏の仏教的理想空間の中心となった象徴性を示す遺跡といえます。